周辺部商店街にみる古きよき仙台七夕祭り

渡辺　杏里

Ⅰ　はじめに

調査対象地域となった宮城県仙台市は、四季折々に大規模な祭りが開催されている地域である。今回の巡検では、盛夏に全国各地から観光客が訪れ賑わう東北四大祭りの一つである、仙台七夕祭りについての調査を行った。現在仙台七夕祭りは、商業化・観光化により市民離れが進んでいるというが、市民主体で行われていた仙台七夕祭りは本当に失われてしまったのかという疑問を出発点とし、中心商店街から離れた周辺部商店街における市民の取り組みから、現在の七夕祭りを捉えることを目的とする。

Ⅱ　仙台七夕祭りの変容

１．古の仙台七夕

七夕祭りが日本に伝わり、仙台独自の風習として定着するに至るまでの歴史的変遷を概観するために年表を作成した（表１）。

七夕祭りの歴史は古く、その起源は古代中国である。一般的に知られている織姫と彦星の星祭りと、「乞巧奠（きっこうでん）」という女子の裁縫や技芸の上達を願う祭りが混交し、日本に伝えられたのが始まりである。当初宮中行事であった七夕は、江戸時代に民間の行事として定着していく。幕府は五節句を制定し、宮廷での儀礼が武家でも行われるようになった。また、寺子屋では、子どもたちが手習いの上達を願い短冊を笹竹に吊るして七夕を迎えた。このように日本の七夕は、宮中行事から将軍家に、武家から民間へと定着していった。

仙台における七夕の始まりは、藩祖伊達政宗公（1567～1636 年）の奨励によるとされ、やがて伊達家をあげての祭りへと継承されていった。七夕は江戸でも仙台でも年中行事として定着していた。城下町でも盛んに飾り付けが行われ、七夕流しの習俗が確立していたと思われる。

明治に入ると、1873（明治 6）年に政府の布告により五節句が廃止され、新暦採用により

表１　仙台七夕祭りの特色と変容

680(天武天王9)年	日本における最古の七夕祭りについての記述が見られる。
734(聖武天皇天平6)年	奈良時代に七夕行事が行われていたことが分かる。
江戸時代	江戸において、年中行事として七夕祭りが定着する。ほぼ同時期に、仙台においても、七夕祭りが年中行事として定着。
1873(明治6)年	政府の布告により五節句廃止。
明治時代	独自の七夕飾り・仕掛け物を飾り定着させていった。
大正時代	各家々が総出で七夕飾りを飾っていた。
1923(大正12)年	関東大震災
1926(大正15)年	関東大震災後の不景気を乗り切ろうと、仙台市内の商店街が「連合大売り出し」を企画。
1928(昭和3)年	「東北産業博覧会」開催
1932(昭和7)年	仙台七夕の観光客数15万人を超える。
1939(昭和14)年	太平洋戦争に伴う仙台七夕祭りの中断。
1946(昭和21)年	仙台七夕祭りの復興。
1947(昭和22)年	昭和天皇の行幸。
1949(昭和24)年	仙台七夕祭協賛会結成。
1953(昭和28)年	ミス七夕コンテスト、書道、絵画、七夕踊りなど実施。
1972(昭和47)年	動く七夕・阿波踊りのパレードなど実施。

七夕は祝日ではなくなった。これにより、全国的には七夕は衰退していったが、仙台の七夕は女子や家庭の祭りとして守られ、続けられた。その理由としては、七夕が盆を迎える準備に入る日で、前盆の行事として定着したためである。また、仙台では七夕が教育行事として学校で行われ、それが各家庭の年中行事となり、一家をあげての祭りとして継承されていった。

このようにして、仙台七夕は、全国に例を見ない独特の文化として根付いていく。仙台七夕祭りは、一連の民俗儀礼のひとつとして、また、家族総出で取り組む行事として、定着していったのである。一般的な七夕飾りが竹に短冊を飾ったものであるのに対し、仙台七夕の飾りの特徴としては、七つの飾り（短冊・吹流し・折り鶴・投網・屑籠・紙衣・巾着）と、くす玉を備えたものであることがあげられる。

２．仙台七夕祭りの商業化・観光化

関東大震災（1923、大正 12 年）後の不景気を乗り切ろうと仙台中心部の商店街などでは連合大売り出しを企画し、「懸賞七夕まつり」などを企画するところも現れ、成功し大いに盛り上がった。また、仙台商工会議所と仙台協賛会（後の仙台観光協会）が共催で、「第一回全市七夕飾り付けコンクール」を開催した。個人賞なども設けられ、盛り上がった。こうした努力により七夕は毎年盛大になり、全国に仙台七夕の名を知らしめることとなる。この時期に、「観光七夕」という側面がクローズアップされ、従来の仙台七夕にはなかった「商店街の七夕」が登場してくる。

しかし､太平洋戦争がはじまると戦意高揚を促すような仕掛け物が登場したこともあったが、戦争の激化に伴い次第に七夕は自粛され、懸賞金も中止となり、市民もやむを得ず飾り付けを見合わせることとなった。そして 1939 年（昭和 14）年、商店街をはじめとする各町各戸は七夕を自粛自戒することとなった。

戦後は 1946（昭和 21）年に七夕が復興され、８月６・７日の両日、東一番丁に十年ぶりの竹飾り 52 本が立てられた。翌 1947（昭和 22）年には、昭和天皇行幸を奉祝し、仙台商工会議所が主催となって、８月５日から７日までの三日間、繁華街から天皇一行の宿舎となった伊達家別邸まで、五千本の七夕飾りが設けられ華やかなトンネルが出来た。この年から飾り付けの審査が再開され、仙台七夕は本格的に復活することとなる。また、商店街の申し入れにより、今日まで続く８月６日～８日の三日間の日程が定着した。

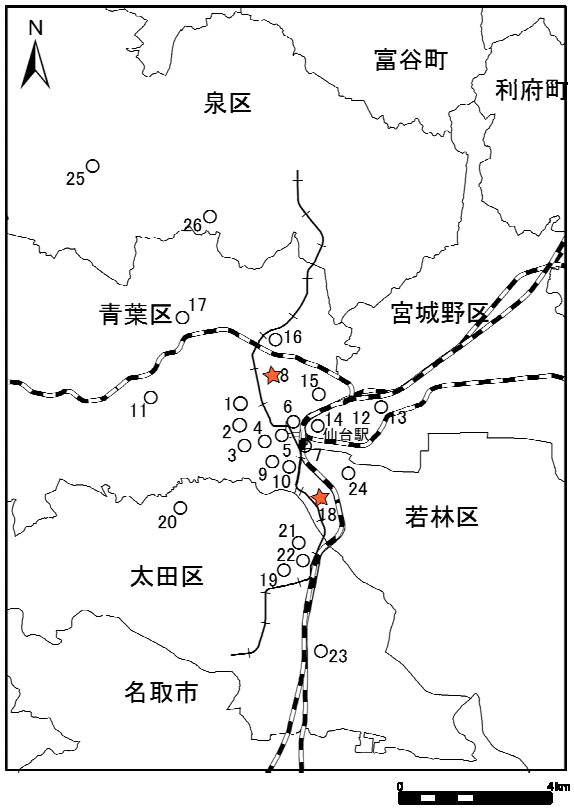
1949（昭和 24）年には仙台七夕祭協賛会が結成され、宣伝活動や附帯行事などを積極的に実施するようになった。1953（昭和 28）年からはミス七夕コンテストをはじめ、書道、絵画、写真コンクール、七夕音頭、七夕踊りなどが実施された。また、1972（昭和 47）年からは動く七夕や阿波踊りのパレードが行われるようになり、豪華絢爛な「一大イベントとしての七夕祭り」となっていく。

現在、七夕祭りの期間、仙台駅前の中央商店街は他県からの観光客で大いに賑わっている。七夕飾りは、豪華絢爛で贅を凝らしており、見ごたえがあり、往来のために手で押すと、その重みや厚みが感じられる。しかし、地域の高校などが製作した七夕飾りも多少ありはするものの、アーケード内の多くの店舗は他県からのチェーン店・テナント企業であるため、実際に七夕飾りを手作りしているのは３分の１程度で、残りは業者に発注された飾りである。また、業者の名前や絵が大々的に押し出された飾りも目立っている。

３．地域の七夕の再発見

高橋・初沢（2003）は、現在の商工会議所、商工会、商店街、企業といった経済団体が中心となった豪華絢爛な七夕祭りではなく、大正期以前の伝統的な七夕祭りの復活を求め、1955 年頃から全市一戸一本の七夕飾りの運動を行っている人々の存在を紹介している。中央商店街のような業者委託の飾りではなく、家族総出で飾りを作っていた頃の手作りの七夕を取り戻そうという取り組みであるが、その成果は思わしくないとも述べられている。しかし、同研究では周辺部商店街による、「地域の七夕」を全面に押し出し、七夕祭りの市民への回帰とも捉えられるような「新しい仙台七夕」の存在も指摘されている。

この「新しい仙台七夕」が行われているのが、周辺部商店街である。中央商店街の七夕祭りが、商業・観光的イベントに特化し、仙台市民離れを誘発しているのに対し、周辺部商店街での七夕祭りでは、観光客と仙台市民のふれあいに重きをおいている。2002 年に仙台七夕祭り協賛会主催で始まった「周辺部七夕バスツアー」では、観光客が実際に周辺部の商店街を訪れ、街並みや歴史を学び、仙台市民とふれあうことが出来る。このような取り組みは、地域をより良く理解してもらうだけでなく、地域の絆を深め、求心力となり、地域活性化にもつかながる画期的な取り組みであると思われる。



1～7：中心商店街
1 一番町四丁目商店街振興組合、2 一番町一番街商店街振興組合、3 サンモール一番町商店街振興組合、4 おおまち商店街振興組合、5 クリスロード商店街振興組合、6 名掛丁商店街振興組合、7 仙台駅前商店街振興組合

8～26：周辺部商店街
8 上杉中央商店街、9 中央市場商業協同組合、10 仙台朝市商店街振興組合、11 八幡町商店会、12 原町本通商工親睦会、13 原町東部商工会、14 仙台駅東口商工事業協同組合、15 宮町商店街振興組合、16 北仙台商店会、17 なかやま商店街振興組合、18 荒町商店街振興組合、19 長町駅前商店街振興組合、20 八木山中央商店会、21 長町一丁目商店街振興組合、22 サンカトゥール商店街振興組合、23 中田商工振興会、24 連坊商興会、25 根白石商店会、26 加茂商店振興会

図１　仙台七夕祭り参加商店街
（平成 22 年度仙台七夕祭り報告書に基づいて作成）

そこで、次章では周辺部の商店街である上杉、荒町の二か所（図１の８と 18 の商店街）において、仙台七夕祭りがどのような意義のもと継続され、地域にどのような効果をもたらしているのかを明らかにする。

Ⅲ　周辺部商店街にみる古きよき仙台七夕

１．対象地域の選定と調査方法

上杉と荒町は、伝統的ながらも創意工夫に溢れる七夕飾りを飾る地域である（近江 2004）。ただし、上杉は高級住宅地である一方、荒町は歴史的な町人町という対照的な性格をもつ。両地域の共通点と相違点を踏まえた上で、周辺部商店街における七夕祭りの特性を明らかにする

表２　上杉・荒町地区における七夕祭り

	上杉	荒町
七夕飾りの本数・()内は商店数	28 (21)	50 (50)
飾りの設置方法	電柱に紐で結え固定	電柱・電灯に紐で結え固定
祭りの主体	婦人会、老人会、商店会	振興組合、婦人会
他のサポート主体	子供会、青年会、鳴海屋紙商事	児童館、雀っこさんサークル、ヤングパワーメント講座、青年部、鳴海屋紙商事
七夕祭りの捉え方・継続する意義	● 平和な飽食の時代に対する感謝の気持ちを表現するため。 ● 地域との繋がり・絆を深め大切にしていくため。 ● 静的・情緒的な仙台独特の伝統的祭りを継承していくため。	● 地域との繋がり・絆を深め大切にしていくため。 ● 地域を盛り立てていくため。 ● 充実感・達成感を得るため。
七夕飾り製作上のこだわり	エコな七夕飾り	コストを抑え作る見映えの良い七夕飾り
祭り運営上の問題点・大変なこと	● 祭りの後継者の育成 ● シャッター通り ● 転勤族が多く定住者が少ないこと ● 七夕飾りを飾る竹の手配	● 自分の生業との両立 ● 祭りの後継者の育成 ● 高齢化・少子化 ● 不参加店舗の増加 ● 七夕飾りを飾る竹の手配
今後の展望	静的・情緒的な仙台独特の伝統的祭りを維持し守っていきたい。	地域内・外の様々な主体との輪を広げていきたい。

（現地調査により作成）

ため、次の方法において調査を行った。

・仙台七夕祭りの当日、祭りに参加して観察を行った。2010 年８月６日に「周辺部七夕祭りバスツアー」に参加し、上杉商店街の祭りを観察し、翌７日は荒町を廻った。また、七夕飾りに使われている材料や、七夕飾りの展示方法、町全体の雰囲気などを観察した。
・ 2010 年９月 12 日～16 日の巡検中、荒町と上杉の両地域において祭りの主体にインタビューを行った。質問事項は以下の７点である。

①七夕祭りの捉え方、継続する意義
②他のサポート主体の存在の有無
③七夕飾りのこだわり
④七夕飾りは業者に製作を依頼するか
⑤七夕祭りに参加することで得られる効果
⑥七夕祭りを運営する上で大変なこと・問題点
⑦今後の展望

以下に調査結果を示すが、その概要について表２にまとめたので適宜参照されたい。

２．荒町における七夕祭り

荒町は、仙台市若林区に位置し、伊達家に従い現在の本荒町の地域に土地を与えられたご譜代町６町の一つとして長い歴史をもつ。ご譜代町は、それぞれの商品の専売と定期市を特権として認められていたが、荒町の場合は麹であった。荒町は、もともと本荒町にあったが、1628 年頃、現在の地に移った。また、荒町の界隈には寺が多く存在し、なかでも満福寺の毘沙門天は特別視されている。1945（昭和 20）年７月の仙台大空襲や 1978（昭和 53）年の宮城県沖地震などの災害時も、奇跡的に荒町は無傷であった。それは毘沙門天の加護であると信じられ

図２　荒町　七夕祭りの風景

（2010 年８月７日著者撮影）

ており、８月に開催される毘沙門天王祭は、七夕祭り同様に荒町市民に重要視されている。明治に入ってから法の規制により麹の製造は衰退していったものの、種々の商業によって栄え、現在も商店街として当時の面影を残しながら息づいている地域である。また、県内の若者のみならず、他県の商店街とも連携し、イベントを行うなど、積極的な地域活性化活動を行っていることでも有名である。

荒町は県道 235 号線をはさんで、両サイドに短冊状の敷地に商店が立地するかたちで商店街が形成されている地域である（図２）。一本のまっすぐな道の両サイドから、色とりどりの七夕飾りがアーチを成しながらどこまでも続いている様子は、非常に美しく壮観である。また、設置している飾りの本数が 50 本と多く、密に見えるため、華やかである。見通しの良い一本道と背景の青空に七夕飾りが映え、より飾りが鮮やかに、美しく見える。

荒町の七夕祭りは、商店街が七夕で地域を活性化させようと呼び掛け、婦人会を始めとした有志が集まり結成され、20 年以上続けられている。荒町におけるインタビューでは、荒町市民センターと振興組合の担当者にご協力頂いた。以下、調査項目ごとに結果を提示する。

①七夕祭りの捉え方・継続する意義：地域の人々との絆を深めること、交流を持つことを第

一の意義としている。祭りに携わることにより祭りの良さを再認識し、また地域の人々とふれあうことが出来、地域おこしとなることが、大きな原動力となっている。また、祭りを成し遂げた後の充実感や達成感も理由となっている。

荒町は町人町であるために、自分たちの生業の傍ら、七夕飾りを製作しなければならないということが、大きな問題である。また飾りの製作だけでなく、竹の調達、設置、片づけなども大きな負担となっている。特に竹の手配は、荒町商店街振興組合の下部組織である青年部が担当しており、青年部無しには祭りが成り立たないという。自分の生業をこなしながらも地域のために祭りを継続していきたいという熱意をもって取り組んでいる人々に、商店街や自治会も協力したいという気持ちになり、祭りを行う上での原動力となっているようである。仙台七夕祭りは、仙台七夕祭り協賛会が各学校や商店街などに参加を呼び掛け、助成金を配布し製作を依頼している。しかしながら、前述のように生業との両立が負担であり、材料費を貰っても割に合わないと参加を辞めてしまった店などもあり、一度止めると継続できなくなるかもしれないという気負いのようなものも感じられた。

②他のサポート主体の存在の有無：児童館、雀っこさんサークル、ヤングパワーメント講座、青年部、鳴海屋紙商事（次章参照）などがサポート主体として挙げられる。雀っこさんサークルは、仙台で５月に催される青葉祭りにおいて、「仙臺すずめおどり」という躍りを披露する祭連（まづら）（団体）である。ヤングパワーメント講座は、若者が地域づくりに携わるという目的のもと活動を行う、若林区中央市民センター主催の講座からの参加者である。前者の３主体は、市民センターが七夕飾りの作り方を教える会を開くことによってつながりが出来、輪が広がるきっかけとなった。

③七夕飾りのこだわり：いかに安く見栄えの良いものを作るかということに重きをおいている。材料は地域の文房具屋や、鳴海屋紙商事で購入したり、折り紙や障子紙、包み紙なども材料になる。日焼けで色あせなかった内側の飾りは、来年度に再利用するなどの工夫を行っている。

④七夕飾りは業者に製作を依頼するか：製作依頼は一切行っておらず、飾りは全て手作りである。

⑤七夕祭りに参加することで得られる効果：商売・損得とは関係なく、地域をあげて祭りに参加すること、また絆が深まるということが、第一の意義である。周辺部七夕祭りバスツアーの際にふるまわれたお菓子やお茶などは、地域の２軒の和菓子屋さんから同じだけ注文されたもので、機会の平等化などにも配慮されていると思われる。

⑥七夕祭りを運営する上で大変なこと・問題点：前述の通り、やはり自分の生業との両立・七夕飾りを飾る竹の手配が大きな負担となっている。その他に、祭りの後継者の育成の問題があげられる。荒町では子どもが少なく、また祭りに子供会は参加していない。地域の小学校に七夕飾りの作り方を教える活動なども行っているそうだが、飾り製作上の手間から本数が作れず、参加を断念している幼稚園や小学校もあるという。また、飾りの作り手が 75～78 歳と、高齢化していることも問題である。さらに、不参加店舗の増加も懸念されている。コンビニエンスストアやスーパーなどは、賃貸契約で店を構えているため、入れ替わりが激しく、商店街組合に参加していたとしても七夕祭りには不参加という店舗が５軒存在し､問題視されている。

⑦今後の展望：昔ながらの癒される、仙台七夕祭りを維持していくとともに、地域の繋がりや、他のサポート主体との輪が広がっていくことを願っているそうである。

図３　上杉　七夕祭りの風景

（2010 年８月６日著者撮影）

３．上杉における七夕祭り

上杉は、仙台市青葉区に位置し、町内は１丁目から６丁目までの六つに町割されている。藩政時代には主として中小身の藩士の侍屋敷が配置されたが、江戸中期以降になると次第に荒廃が進み、空き屋敷や拝借地となった。そのため、当時の様子を記した書物などは殆ど残されていない。明治・大正期には田園的な地域となったが、戦後の都市計画を経て、町の様相は大きく変化した。官公署や事務所、会社や銀行、官舎などが相次いで建設され、現在では仙台市内で一、二を争う高級住宅地となっている。

上杉商店街の七夕祭りでは、車の交通量が多く、人の往来も盛んであるため、それらの邪魔にならないように、かつバランス良く見えるように、竹の設置位置が熟慮されている（図３）。色や形のバリエーションが豊富なくす玉のついた吹流しが風に揺れる様は非常に上品で艶やか

である。地域の子どもたちが描いたという七夕をテーマにしたポスターが 300 枚以上飾られ、鉢植えの竹に七夕飾りが施されたものが軒先に据えられていたりと、アットホームな雰囲気を醸し出している。

上杉の七夕祭りは、商店会のＮ氏と婦人会を中心に始められ、その４・ 5 年後に子供会が参加するようになり、現在まで 20 年以上続けられている。インタビューでは、上杉の七夕祭りの中心人物となっている商店会と婦人会の方々、子供会代表の方々にご協力頂いた。以下、調査項目ごとに結果を提示する。

①七夕祭りの捉え方、継続する意義：老人会・婦人会の方々は、戦争を経て平和な飽食の時代を迎えることが出来たことに対する感謝の気持ちを表現するために、七夕祭りを行っているという。七夕がないと仙台ではないという、七夕祭りの歴史に対する強い想いと、祭りを守っていかなければならないという熱意ももっている。また、上杉では、商店会と町内会、その他の多くの主体との関係が非常に密である。そのことからも、いかに地域の絆や愛情を大切にしているかがうかがわれた。この主体間の密な連携が、上杉の重要な誇りやアイデンティティーとなっているようである。さらに、老人会、婦人会の方々によると、今年度の七夕祭り終了後からすぐ来年度のことを考え始め、祭りが楽しくて仕方がないという。祭りを生きがいとし活き活きと生活していることが窺われる。

子供会は小学校１～６年生のみの参加で、子供会に入会すると自動的に七夕祭りに参加することになる。ただし、図案などを一から考え製作しており、積極的な参加が見られる。

②他のサポート主体の存在の有無：子供会、青年会、鳴海屋紙商事などがあげられる。上杉では非常に創作的な活動が行われている。七夕祭り開催時に町内に貼られていた、地域の子どもたちの七夕をテーマにした絵の中で、特に良い作品は、企業の展示場で飾られたそうである。このように、一部法人も参画していることが分かった。

また、Ｎ氏の発案で、障がい者の方を雇用しミニ七夕のキットを創作し販売したり、無添加栽培のずんだまめを使用したずんだもちがバスツアーでふるまわれるなど、画期的な取り組みを行っている。周辺部七夕バスツアーにはリピーターもおり、上杉のこうした創造的な取り組みが、大きな求心力になっていると思われる。

③七夕飾りのこだわり：エコな七夕というものにいち早く取り組んできた地域。20 年ほど前はチラシや新聞紙などを用いて七夕飾りを創作していたが、最近はそれに加えミキロン化学繊維など、洗濯機で洗いアイロンをかければ再利用できる材料を用いている。他に、和紙は鳴海屋紙商事から購入している。

④七夕飾りは業者に製作を依頼するか：製作依頼は一切行っておらず、飾りは全て手作りである。

⑤七夕祭りに参加することで得られる効果：見返りや金銭的なことは関係なく地域のために行っているという。祭りを通じて地域のつながりが深まること、また伝統的な七夕祭りを維持していくということが最も重要視されている。祭りの実行委員や子供会の代表は毎年変わるが、それでもつながり・交流が切れないという連帯感を、再確認する機会でもある。

⑥七夕祭りを運営する上で大変なこと・問題点：上杉は高級住宅地であるが、祭りの担い手である商店経営者にとって、店と飾りの両立はやはり難しく、祭りの参加者が減ってしまうことが懸念されている。また、地域には転勤族が多く定住者が少ないために、祭りの後継者を育

成することが困難である。七夕飾りを飾る竹の調達・手配・設置・片づけが非常に重労働であることも問題とされている。

⑦今後の展望：仙台七夕祭りという、静的かつ情緒的な祭りを守り継承していくことを望んでいる。仙台七夕祭りとは本来、吹流しが涼やかに揺れる音を、耳を澄まして聴くような、静的で情緒的な祭りであるため、そこに騒動（踊りやイベント）を持ち込まないで欲しいという願いがある。七夕祭りから経済効果が期待できるのは一部の宿泊施設のみであり、他県や他地域から別な祭りや風習が入ってくることによって、自分たちの祭りが縮小してしまうという危機感と不快感を感じているようである。

Ⅳ　周辺部商店街の七夕祭りを支えるその他の主体

前述の通り、周辺部商店街の七夕祭りにはたくさんの主体が関与し、実施されている。そこで、周辺部商店街の七夕祭りと密接な関係を持つ、商工会議所、市役所、鳴海屋紙商事の三つの主体にもインタビューを行った。

１．仙台商工会議所ならびに市役所

仙台商工会議所と市役所は、仙台七夕祭り全体を取り仕切る主体である。インタビューでは、仙台商工会議所と、市役所の担当者にご協力頂いた。

まず、高橋・初沢（2003）では、かねてから周辺部商店街では観光客が少なく、中心商店街に対して不平等感を抱いていたという点が指摘されている。そこで、以下の質問事項についてお答え頂いた。

①中央商店街と周辺部商店街をサポートするための政策の違い

②政策の意義・問題点

③今後の展望

以下、項目ごとに結果を提示する。

①中央商店街と周辺部商店街をサポートするための政策の違い：仙台商工会議所の活動としては、仙台市内の商店街、学校、PTA などに七夕祭りへの参加を呼び掛けること、助成金を配分すること、マスコミ・メディアを用いた県外への広報活動、商店会との意見交換、七夕飾りの審査・賞の贈呈、祭りの実行・切り盛りなど、多岐にわたる。しかし、中央商店街と周辺部商店街、または周辺部商店街同士へのサポートに違いは設けていないそうである。

2002 年に始まった周辺部七夕バスツアーも、昔ながらの七夕の良さを県外の観光客にアピールし、素朴な周辺部の七夕祭りに触れてもらおうと企画したという。もちろん七夕飾りの審査会で受賞すれば、賞金が出るために、受賞した町としていない町では差が出来てしまうことはあり、また助成金も額としては縮小方向にあるけれども、それぞれの団体に対する助成金の額に特段差は設けていないという。

市役所もまた、祭りを運営する上で、商工会議所同様のサポートを行っている。祭りの助成金を負担する、祭りの実行委員としての参加、私道や公道の管理・閉鎖などの交通規制、警察と連携しての警備、市のトイレ開放、熱中症対策の救急隊員結成など、きめ細やかな補助を行い、祭りが円滑に運ぶようにサポートしている。

②政策の意義・問題点：仙台商工会議所は、中央商店街、周辺部商店街ともに、同じサポー

トを行い、県外の観光客にも様々なアピールを行っているが、そもそも仙台七夕祭りは、地元の仙台市民が楽しめなければ意味がないという考えを強く持っている。しかし、祭りを運営していく上で、いくつかの問題も抱えているようである。

まず一つ目に、テナント企業の広告が非常に目立つということである。中央商店街の七夕飾りも、周辺部商店街同様に、出来る限り和紙や竹を再利用したり、一部の飾りは全国各地に提供するなどの努力をしているという。しかし、飾りのなかには、テナント企業の広告や名前があまりにも目立つ、もしくは和紙ではなくビニール・プラスチック素材で出来ているなど、好ましくない飾りも少なくない。また、仙台七夕祭り全体の飾りも、年々活気がなくなってきているという懸念も抱いている。

二つ目に、いかにして観光客を引き付けるかという問題である。仙台七夕祭りの今年度予算は１億円を超えている。そのため、県外からの観光客の経済効果に期待したいところであるが、昼に仙台に寄り、七夕飾りを鑑賞し、他県の祭りにも足をのばすために仙台には宿泊しない観光客もおり、いかにして仙台に宿泊して貰えるかが鍵という。観光客をひきつけるために、七夕祭り開催期間中、通りや広場で演奏や踊り、郷土芸能などを披露するエンターテイメント性の高い「星の宵祭り」を企画したところ、七夕祭りに何の関係があるのかと批判の声も寄せられたという。また、仙台市民の参加を促すために、今年度より市民広場でステージイベントや七夕作り体験ブースなどを設けたが、広場ごとに主体が異なるために、うまく連携がとれないなどの問題も発生した。

③今後の展望：様々な問題を抱えてはいるが、祭りに携わる気持ちは、周辺部商店街の人々と何ら変わりなく、人々に感動を与え、文化度の高い祭りにしたい、参加する人数が減ったとしても、満足する人が一人でも増えればそれで良いという、心意気・熱意が感じられる。

２．鳴海屋紙商事

鳴海屋紙商事は、仙台七夕祭りに古くから携わり、祭りになくてはならない存在となっている。今回のインタビューでは、七夕企画室の担当者にご協力頂いた。

鳴海屋紙商事は仙台七夕祭りに携わるようになり今年で 126 年という長い歴史を持つ和紙屋であり、県内・県外のみならず、要望があれば海外にまで展示のために赴いている会社である。材料となる和紙の販売から、飾りの企画、製作、展示、配達と、多岐に渡る一連の作業を総合的に担っている。地域のシルバーセンターに訪問し、七夕飾りの作り方を教えたり、また、海外からの発注にも対応し、販売のみならず、今年の５月にはロサンゼルスで七夕飾りワークショップを開催して、七夕祭りという文化自体の普及に努めている。

毎年、七夕には何百ｔという和紙が使用されている。昔ながらの手漉き和紙の製作会社は宮城県白石市に一軒のみとなってしまい、機械抄き和紙を扱うこととなった。それでも、その年に合わせ、時事ネタ（例えば、サッカーワールドカップ日本代表選手の仕掛け物）を盛り込んだり、不景気のときには色とりどりに趣向を変え、見た人に元気が湧くようなデザインにするなど、細やかな気遣いがされている。伝統的な祭りを守りながら、新しいものを取り入れ、より良い祭りとしてこれからも続けて行きたいという愛情が感じられる。また、鳴海屋紙商事は、和紙を用いた小物や七夕祭りに関する書物をインターネットを通じて販売している。これが県外及び海外の人々の関心を大いにひき、七夕の普及のきっかけになっているように思われる。和紙作りから七夕飾り製作というノウハウを要する作業を手掛け、また七夕祭り普及にも力を

いれている鳴海屋紙商事は、今後も仙台七夕祭り存続のために重要な役割を担うと考えられる。

Ⅴ　まとめ

今回の調査では、先行研究で指摘されていたような商業化・観光化の進む七夕祭りではなく、様々な地域の主体が精力的に取り組んでいる周辺部商店街の七夕祭りにふれ、その熱意・愛情に感銘を覚えた。その一方で、七夕祭りを運営する上で問題・困難となっていることや、将来的に問題となるであろうことなども明らかとなった。

まず一つ目の問題として、七夕飾り設置のための設備が周辺部商店街にはないことが挙げられる。高橋・初沢（2003）で指摘されていたように、アーケードの有無が七夕飾り設置を大きく左右していた。中央商店街には、鉄筋で出来たアーケードがあり、その天井に渡された鉄棒に、七夕飾りを飾ることができた。しかしながら、周辺部商店街には、アーケードや七夕飾りを設置するための特別の設備が無いために、飾り設置のための竹を手配・設置しなければならず、竹を電柱・電灯に結えるという重労働を避けられず、また車や人の往来を考慮しつつ飾りを飾るという困難を強いられてしまう。さらには、風雨を避ける役割をも兼ねるアーケードが存在しないため、七夕祭り開催期間中の悪天候によって、飾りが崩壊し、往来の妨げになってしまうなどの例もあり、七夕飾り設置のための設備が無いことが、様々な面でネックとなっているように感じられた。

二つ目に、高齢化と後継者に関する問題が指摘される。祭りのノウハウを知る担い手が高齢化していく一方で、少子化により地域に子どもが少なく、祭りには不参加または定住せず地域から流出してしまうなど、将来的に祭りが存続していく上で看過出来ない問題であると考えられる。また、仙台生まれ仙台育ちの人でも、地域によっては飾り作りに携わったことのない人も存在しており、地域内での協力だけでなく、伝統の地域間格差を埋めるための教育・普及なども不可欠であると思われる。

今後、仙台の七夕祭りは変容を伴いつつも継承されていくと思われる。並々ならぬ熱意と愛情を持ち、祭りに取り組んでいる主体が存在するため、これからも盛夏を彩る一大イベントとして隆盛することを期待したい。

謝辞　本研究を進めるにあたり、ご協力下さった皆様に感謝いたします。突然のお願いや非礼にも関わらず、親切かつ真摯に対応して下さり、誠にありがとうございました。記述や認識に誤りや不行き届きがございましたら、こちらでお詫びを申し上げるとともに、ご指摘いただければ幸いです。

文献

阿南　透　2009. 都市祭礼　仙台七夕祭りの成立と変容. 情報と社会 19: 37-51.

近江惠美子　2004. 仙台七夕の伝統と継承. 東北生活文化大学東北生活文化大学短期大学部紀要 35: 37-46.

近江惠美子編著　2007.『仙台七夕まつり　七夕七彩』風の時編集部.

岡村直樹　2003. みちのくの夏を彩る―七夕―. 土地改良 235: 50-53.

高橋綾子・初沢敏生　2003. 仙台七夕まつりの変容に関する一考察. 福島大学地域創造 15: 3-10.